

薬師寺金堂基壇の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

金堂は、昭和44年に近畿大学杉山信三教授等の調査隊により、基壇の一部が発掘調査されているが、鉄骨コンクリート構造による昭和の新工事に伴い、遺跡の部分的破壊はさけられぬ事態となつたので、この際徹底的に創建時の遺構を調査する必要が生じた。薬師寺の委嘱を受けた当調査部は、昭和46年11月8日～12月27日にかけて、調査委員会の指導のもとに基壇まわりを主とする813m²を発掘調査した。

遺構 基壇上には天文14年再建（小屋束銘）、慶長5年大改修（棟木銘）の単層入母屋造の仮金堂が建っていたが、復興工事のため、本尊安置の大理石製壇正積仏壇（創建当初材、昭和32年解体修理）とともに46年8月に撤去されていた。発掘に先立ち現基壇を写真測量した。ついで江戸時代に拡大修造された壇正積基壇の花崗岩化粧石、敷瓦、旧裳階柱筋の置き重ね礎石と地覆石、及び向拝部の礎石を取り外した。さらに旧基壇周囲の積土、堆積土を排除して、当初の裳階礎石、はめ石、地覆石、雨落溝などを検出した。

基壇は東西29.19m（98.3尺）、南北18.01m（60.6尺）、復原高1.5m（5尺）である。掘込地業はみられず旧地表上に砂質土と粘土を交互につき固め基壇を築成している。地覆石は凝灰岩でほぼ全周間に完存している。前面高さ37cm、奥行幅36cm、長さ120cm内外である。上面

第1図 金 堂 基 壇 平 面 図

に幅約20cm、深さ3cmのはめ石仕口がなされている。

延石はみられず、旧地表直上の整地土にすえられている。はめ石は凝灰岩で、後世向拵が附設され土壇が築かれた南面に、完形のまゝよく残っていた。前面高さ115cm、厚さ27cm、幅70cmである。上半部には強い火熱による変色がみられる。上端中央には幅7cmの葛石への仕口となる枘が作られている。片面、一部では両側面に幅6cmほどの溝がほられているが、石の接ぎ目に履ぎね状のものを入れたにしては、仕口が一方だけの箇所もあって具合が悪く、あるいは初めの計画が変更されたのかもしれない。隅のはめ石は一石をL字型に造り出したものである。東石は用いられていない。葛石は発見されておらず、はめ石天端と水たれ勾配を加味した敷石上面延長線との高低差は15cm位で、敷石の厚さに近いので、外まわりの敷石が葛石をかねていた可能性が強い。敷石は凝灰岩で、創建のものは厚さ15cm前後である。磨耗損傷がひどく、伊豆石や擬石などで補修された部分が多い。

第2図 磁石据え付け状況土層図

磁石は花崗岩で、大部分のものに焼けた痕跡がある。上部におよそ74×74cmの方形の造り出しがあるが、への8のみ円形の造り出しをもつ。以下磁石を番付記号で記述する(第1図)。への3、への4は背が1m程の大きなものである。この両磁石間をたち割って調査したところ、基壇上を途中までいたん積上げた後に、磁石据え付け穴を掘り磁石を据え、再び土をつき固めて、基壇を築きあげていることがわかった(第2図)。ニの3、ホの3の位置には磁石抜き取り穴を確認した。根石はみられなかった。裳階磁石は現側柱磁石の直下にかかり沈下しながらもすべて残存していた。花崗岩で、への1を除きほぼ36×36cmの方形の造り出しがある。すえつけ掘りかたは、基壇上面から切込まれている。これも根石は使われていない。大半の磁石は傾斜しながら沈下したため、現側柱磁石を支える際に柱座は水平にはつられたことがわかった。

建物は7間×4間、裳階つきで、桁行総長26.73m(90尺)、梁行総長15.60m(52.5尺)、軒の出4.16m(14尺)である。単位尺は復原奈良尺29.7cmである。柱間寸法は裳階の間6.25尺、正面中央3間は12.5尺、その他は10尺である。磁石地覆座の有無及び形状から、身舎の5間×2間は正面中央3間と背面中央1間が扉で、その他は壁で囲われていたと推定できる。側柱筋は開け放ちであったと思われる。裳階では背面中央5間の磁石に地覆座があり、中央1間はその幅が広くて扉口、両脇各2間は壁と考えられる。

階段は、正面では中央及び2間おいて東と西に計3箇所、東西両側面と背面では、中央に1箇所、幅1間分のものが設けられていたことが、遺存する地覆石により判明した。したがって両側面ではホの1、10の裳階柱が階段の中心線上にくることになる。基壇まわりには、幅75cmの玉石敷の犬走りがあり、さらに幅45cmの雨落溝がめぐらされている。これらは背面によく残存しているが、補修された部分も多い。溝底は東南隅が最も低く、東に延長してい

るので、雨水は東面回廊雨落溝に流入するものと推定された。

次に創建後の遺構の変遷について述べる。正面の西階段部には石質の異なる花崗岩はめ石を、東階段部には凝灰岩はめ石をよこにしたものを探出したが、いずれの上部にも焼け痕があったので、東と西の階段は享禄元年（1528）の火災以前に取り除かれていたことがあきらかとなった。又現向拝礎石の真下に、それぞれ旧向拝礎石（イ通り）を発見した。それらは川世の瓦を多量に含む、基壇を半ばまでうめた地盤上にすえられており、その上部に焼土層が密着するので、中央5間分に享禄火災以前から現状と同規模の向拝があったことがわかる。正面両脇階段の廃止は、この向拝の設置に関連するものであろう。はめ石上面前角には、半間間隔で幅18cm、深さ15cmの欠き込みがあり、向拝の根太仕口と推測された。その部分には焼損の痕がないので、火災後の向拝は板張りの床で舞台のようになっていたと推察される。なお現向拝には寛永の墨書きがあり、寺藏古記録によると安永年間にも大修理をうけている。また文化4年の記録には柱数70本余とあり、ニの3、ホの3の礎石はその後に抜き取られることになる。金堂基壇はこのように後世手を加えられているとはいえ、創立以来の礎石、はめ石、地覆石、東石を用いない古い形式の基壇石積等をよく伝えている。

遺物 遺物には瓦、土器、金属製品のほかに乾漆仏の破片などがある。瓦は本薬師寺出土のものと同範のものも少數あるが、その大部分は鎌倉時代以降のものである。軒丸瓦では蓮華文・巴文をもつもの、軒平瓦では唐草文・剣頭文をもつものなどがある。ほかに鬼瓦や鳥衾などがある。土器は土師質の小型灯明皿が大部分を占め、瓦器も少量出土している。銅製品では、方形（15×14cm）および円形（10cm）をなす二種の木口装飾用の透彫りした金具がある。方形の金具は前回の調査の際、講堂東北隅で出土したものと同形同大のものである。円形の金具は裳階の垂木先用のものであろう。また中心と周縁に3個の釘穴とみられる小孔を穿った円形銅板（径8.5cm）が2例ある。ほかに葡萄唐草文の飾金具（4.4×4.5cm）や蓮弁を彫りし、さらにいわゆる火焰をもあらわしたナスピ形の鉛などが出土している（第3図）。貨幣として開元通宝、大觀通宝、大中通宝、熙寧元宝、元豐通宝、皇宋通宝、寛永通宝、文久永宝などがある。大觀通宝（1107鑄造）は、基壇の背面西寄りで、乾漆仏破片などを含む灰褐色粘土中から多量まとまって出土した。乾漆仏の破片は、表面に金箔が残り、前回も少量出土しているが、今回、基壇背面の階段付近からガラス製小玉（緑・黄・褐色など）とともに多量に出土した。

（藤原武二）

第3図 飾金具（左）

鉛（右）